

# 龍谷大学 「悲しみから生まれるもの」 震災救援につながる真宗学の可能性

龍谷大学は、赤松徹真 親鸞聖人御祥月お逮夜法性 についての研究成果 学長の呼びかけにより、要を阪神・淡路大震災20の1部を発表した。鍋島



年追悼として深 教授の自坊は神戸三宮近 草、大宮、瀬田 くにあり、阪神大震災で の3学舎で営ん 被災。東日本大震災では、 だ。深草顕真館 被災地を20回以上訪れて では15日、法要 支援を続け、篤い信頼を に続いて鍋島直 得ている。

樹文学部教授が 鍋島教授が着目したの 「悲しみから生 は『無常』である。 まれるもの」と 前提として、故・廣井 題して法話し 脩東京大学大学院教授が た。

この中で「震 な災害観を紹介した。大 災救援につなが 震災などが起きたとき、 常』は自明のことだった 真宗学の可能 3つの見方が生じるとい

「1つは、災害に不ず 突然亡くなった方々、全 た自分を責めずに、互い 後で、はじめて愛の尊き 酒でもお菓子でも何でも 心構えを強調する精神 壊した家屋、燃えてなく に助け合って生き抜いて に気づく。また悲しみや い。法事で、遺族は亡 論。2つ目は災害が天罰 なった街を目の当たりに いうと無常観は教えて 煩惱があるからこそ、愛 き人を偲び、お酒や料理 とみる天罰論で、天譴(てん して、あまりにも悲しく、 いる。そして決して壊れ 情の深さや心の絆に気づ を家族縁者にふるまうこ んげん)論ともいつ。3 世の無常さを受け止めき ない真実の教え、死別し く」とし、親鸞聖人は死 とで、亡き人から受けた 目は定められた運命と できなかった。無常観が敵 てもまた合える浄土をめ 別の悲しみに3つの角度 愛情を確かめ合い、慰め 考える運命論。

鍋島教授は、「天罰論 ある。無常の真意とは何 指し示す。 もう1つは、無常とは、 第1に、「悲しい時に 依りどころが心の中に生 は涙を抑えなくてもかま まれると、悲しみを乗り わない、泣きたい時には こえてゆけるようにな 涙すればいい」と説いてる」と説いた。死を超え ないはず」とした。 神戸高校の先輩である す。 作家の村上春樹氏の「無 1つは、天罰論のよう 悩みの間にもきつと光が と嘆き悲しむ凡夫なのだ こののない真実である。 から、平静を装い、無理 亡き人は仏様になって に悲しみを押しとどめる 今も心に生きている。そ うした死を超えた確かな 必要はない。

葉を紹介し、「仏教者で 思想でもない。いのち ある私にとって『諸行無 ははかなく、どうするこ ありゆる苦しみの根本 第2に、「悲しむ心を 心のつながりが、生きる 常』は自明のことだった ともできない死別の悲し である愛別離苦。鍋島教 少し休ませてくだささい」 力を取り戻すことにつな みがあから、生き残っ 授は、「私たちは別れのと 説いた。忘憂であれば がるだろう。

が、阪神淡路大震災で、

文化時報 2015 年 1 月 28 日 (水)